

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 20

1985年12月1日

第20号 目 次

1. 理事会報告
 2. 学術・文化情報
 3. 近着会員業績
 4. 事務局から
- 定例研究会のお知らせ
○ 海外ラテンアメリカ研究センター紹介

1. 理事会報告

第26回理事会

日時：1985年6月8日(土) 12:30~13:30

場所：上智大学

出席者：中川理事長、加茂、松下、水野、高山、恒川、石井、細野、原田、辻各理事 以上10名。

○ 前回理事会議事録の承認

追加事項として、東日本部会の連絡先を上智大学とする。次期開催校として東京外国語大学と交渉する。

○ 審議事項

i) 総会関係

○ 総会提出の決算・予算案について

決算について、約八割の会費納入率があり、財政逼迫の訴え、理事による働きかけが効を奏したものと評価される。人件費が事務局の負担により、低く抑えられており、この点は今後の検討課題とする。

予算について、定期大会費に定額10万円を計上する。会費収入については、八割の徴収率として、15~20万の減額を見込んでおく必要がある。

ii) 事業計画について

年報、会報(3回)の発行、東西部会の開催。定期大会を東京外国語大学にて開催するなど。

以上、総会提出の決算、予算案、事業計画案を承認。

iii) 61年度会費値上げについて

正会員7000円とし、うち大学院に在籍するもの(学生会員)は2000円減額する。準会員は25ドルとし、61年度から実施することを総会に提案する。

iv) 新入会員審査

正会員8名の入会を承認した。(新入会員の氏名等については会報№19に掲載)

2. 学術・文化情報

i) 第45回国際アメリカニスト会議に出席して 高山 智博

1985年7月1日から7日にかけて、コロンビアの首都ボゴタで、第45回国際アメリカニスト会議が開催された。110年の歴史を持つこの会議でも、コロンビアで開かれるのは初めてのせいか、大変な熱の入れようで、開会式にはベリサリオ・ベタンクール大統領のあいさつがあり、記念切手まで発行されるほ

東日本部会第11回

定例研究会のお知らせ

日時 1985年12月14日(土)14:00~16:30

場所 上智大学7号館11階第2会議室
(国電・地下鉄線 四ツ谷駅下車)

- 報告
1. 「メキシコにおけるマキラドーラ(保税加工)工業の現状」
福井博康(日本プラント協会)
 2. 「二つのパラグエイ移住史—日系移住とメノ教徒移住—」
今井圭子(上智大学)

☆お問い合わせは上智大学・高山智博まで
(03-238-3717又は3530)

どであった。また受け入れ態勢もほぼ万全で、物騒な国という評判とは反対に、滞在中、コロンビア人の親切さだけが印象に残ったものである。

会場となったロス・アンデス大学 (Universidad de los Andes) は、丘の斜面に立つ緑の美しい静かな環境のところであった。しかも学校が休暇中ということもあって、会議は落ち着いた雰囲気のうちに行われた。

会議の出席者は約1500名。50カ国以上から参加したことごとだが、海外からの参加予定者に欠席が目立ったのは、やはり経済危機の余波なのだろうか。日本からは、コロンビア出身のグスタボ・アンドラーデ、染田秀藤、湯川攝子氏など6名、それにメキシコで発掘をしている杉山三郎氏と、当時コロンビアの日本人大使館勤務だった二村久則氏が参加した。

会議では107のシンポジウムが12の分野にわかれて行われた。その分野とシンポジウム数は次の通りである。人類学(41)、芸術(5)、経済(13)、教育(3)、哲学(2)、歴史(11)、情報科学(1)、言語学(3)、政治学(8)、国際関係(5)、記号学(1)、社会学(14)。この他、シンポジウムのテーマに該当しない報告は、一般部会で発表された。全体の報告数は優に800を越えており、その多岐にわたる発表の全容を伝えることはできないが、この会議に参加して感じたことを一言だけ記してみたい。

各シンポジウムは実行委員会などの合意のもとに、そのコーディネーターの方針と責任によって行われた。この方法はそれなりに有効であるが、総括的な面で問題も多い。たとえば、私が出席した人類学関係のシンポジウムでは、文化的アイデンティティに関連するシンポジウムが二つあり、その他に、社会学でも三つ、芸術と哲学でもそれぞれ一つずつ、文化的アイデンティティをテーマにしていた。これはこの問題に対する関心の高さを示すものであろうが、それらのシンポジウムがばらばらの形ではなく、まとまっていたならば、より一層の成果が得られたにちがいない。またこのテーマを扱った学者がすべて白人であったためか、ラテンアメリカの文化的アイデンティティは「基本的にイスパニア的なもの」とする意見が多かった。白人の視点だけでな

く、原住民や黒人の見方も知りたいものだった。

ともかく、コロンビアという白人、黒人、原住民から成るきわめてラテンアメリカ的な国での会議は、出席者たちの思いをこの原点に馳せさせたことも確かであろう。

ii) 第3回ラテンアメリカ・日本金融経済交流シンポジウム (The Third Symposium on Financial and Business Cooperation Between Latin America and Japan)

細野 昭雄

上記シンポジウムが去る10月14・15日の両日にわたり、経団連会館において開催された。これは米州開発銀行 (IDB) と日本輸出銀行の協催によって行なわれたもので、1979年の第1回、1982年の第2回に続くものである。ラテンアメリカからは、米州開発銀行オルテス・メナ総裁ほか、ラテンアメリカ20カ国から経済閣僚、中央銀行総裁を始めとする官界および民間人が参加し、日本からも金融界などを中心に、多数の参加者があった。シンポジウムにおける討議の主なテーマは、第1セッション「ラテンアメリカ経済の発展の展望、ラテンアメリカと日本の経済関係」、第2セッション「債務管理と開発金融の新しい可能性、(1)政策策定における現状と展望、(2)調整政策におけるいくつかの経験」、第3セッション「ラテンアメリカ地域における経済回復と成長のための政策、(1)経済金融政策、(2)工業開発政策」、第4セッション「貿易と投資における協力の可能性、(1)技術移転と新しい投資機会、(2)貿易拡大のための国際協力」、第5セッション「外国資本の導入を加速化するための協力の方法、(1)中米およびカリブにおける投資機会、(2)銀行の役割と証券市場」であった。

今回は韓国における世界銀行、IMF年次総会の直後であったこともあって、同会議に出席した人々の多くが、このシンポジウムに参加し、きわめて有意義なシンポジウムとなった。

特に現在の累積債務危機に直面するラテンアメリカ各国が、どのような政策を実施し、成果を挙げているか、またそうしたなかで、日本との協力のあり方はいかにあるべきかな

どについて、どのような意見が交換されるか注目されていた。累積債務下の経済運営に関しては、これまで比較的成功しながら、最近の石油価格の低落と地震の被害で、新しい困難に直面しているメキシコ、ラテンアメリカの主要国のなかで、ただひとつ債務繰延べを要請していないコロンビア、最近物価と賃金の凍結により、かなりのインフレの抑制に成功をおさめつつあるアルゼンチンなどの最近の状況に関心が集まった。また経済協力に関しては、米州開発銀行、アンデス開発公社、中米経済統合銀行の活動状況が紹介され、また日本からはブラジルへの造船業への技術移転の経験、ラテンアメリカとの貿易などについての意見が述べられた。

日本とラテンアメリカの主要各国の二国間の経済関係についての討議は、定期的に行なわれているが、ラテンアメリカ諸国と日本が一堂に会して討論を行なう機会が少なく、このシンポジウムにおける意見交換は、きわめて有意義なものとなった。

iii) アジア経済研究所では、ペルーの Instituto de Estudios Peruanos 所長 Dr. Julio Cotler を招聘して、11月5日、6日の2日間「80年代ラテンアメリカの民主化」に関するワークショップを開催した。報告者およびテーマは以下のとおりである。

Julio Cotler : La democracia latinoamericana en los ochenta :
problemas y perspectivas

遅野井茂雄 : Reto democrático para crisis de los países andinos :
observaciones

松下 洋 : La democratización argentina en 1983 : observaciones
preliminares

また11月6日にはCotler氏による講演「Crisis and democracy in Latin America」が行なわれた。

iv) 昭和60年度海外学術調査リスト

(①課題名 ②調査国 ③研究代表者)

- ①ボリビア国チャカルタヤ山での空気シャワーの測定調査 ②ボリビア ③埼玉大 俣野恒夫
- ①第4次核アメリカ(中米・アンデス地区)

調査—中央アンデス北部における形成期文化の研究— ②ペルー、コロンビア ③東大 寺田和夫

- ①環カリブ海地域における複合文化の比較研究—アフリカ・アジア系社会の文化空間の変動過程— ②マルチニク、スリナム、ドミニカ、グアドループ、セントルシア、トリニダード・トバゴ、ハイチ、仏領ギアナ、ジャマイカ、キューバ、コロンビア、ベネズエラ ③東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所 山口昌男
- ①ブラジル、リオ・ドッセル湖沼群の陸水生生態学的特性と湖沼類型に関する研究 ②ブラジル ③名大・水圏科学研 西條八東
- ①パタゴニア地域の氷河における水文・気象学的研究 ②チリ ③京大・防災研 中島暢太郎
- ①乾燥地域の農業開発にともなう耕地生態系の保全と生産性に関する調査研究 ②メキシコ ③鳥取大 杉本勝男
- ①中南米、特にコスタリカにおける肺吸虫症の病態生理学的研究 ②コスタリカ ③広島大 辻 守康
- ①南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究 ②メキシコ ③九大 野村暢清
- ①エル・ニーニョ現象との関連からみた赤道アンデス地帯に於ける第四紀の気象変化 ②ペルー、エクアドル ③都立大 野上道男
- ①隕石の大気突入および衝突時の生成物の現地採取と分布の調査 ②メキシコ ③学習院大 長沢 宏
- ①中央アンデス農牧民社会の民族学的研究—南部高地における地域差と社会変化— ②ペルー、ボリビア、アルゼンチン ③国立民族学博物館 友枝啓泰
- ①南米における病原性黒色真菌の生態学的研究および黒色真菌症の疫学調査 ②ベネズエラ、ブラジル、コロンビア ③千葉大・生物活性研 宮地 誠
- ①環太平洋地域新生界の対比と編年 ②チリ、ペルー、エクアドル コロンビア ③静岡大 土 隆一

v) 昭和60年度国際交流基金訪日者リスト〔文化人短期招聘者〕

VEGA, Pastor (キューバ 43才) 15日間

映画庁長官、映画監督、東京国際映画祭シンポジウム出席 日・キューバ映画交流

DELGADO, Luis Paulino (コスタリカ 44才) 15日間 コスタリカ大学芸術学部長 日本の現代美術視察 芸術家との意見交換

SANCHEZ, Martínez Fernando (ドミニカ 40才) 15日間 サント・ドミンゴ自治大学長 (医学) 日本との学術交流 日本語講座開設等のための意見交換

RUIZ, Miguel Angel (ニカラグア 42才) 15日間 中米大学長 (社会学) 日本の近代化および発展に果たした教育の役割につき調査研究のため

AQUIRRE VELAZQUEZ, Ramon (メキシコ 49才) 8日間 メキシコ連邦区長官 世界大都市サミット会議出席

SERRANO, Francisco Díaz (メキシコ 35才) 15日間 国立芸術院国際局長 日本の文化事情視察

GOROSTIZA, Carlos (アルゼンチン 64才) 15日間 文化庁長官 小説・劇作家 舞台監督 日本の文化行政 芸術事情視察

DURANGO, Beatriz Parra (エクアドル 46才) 15日間 教育文化省文化次官 ソプラノ歌手 日本の文化行政 芸術事情視察

CARVAJAL, Amparo Sinisterra (コロンビア 48才) 15日間 コロンビア文化庁長官 コロンビア・クラシック・バレエ協会理事長 日本の文化行政 芸術事情視察

ROJAS, Lucia Caycedo de Perdomo (コロンビア) 15日間 コロンビア国立博物館館長 日本の博物館視察

RADA, Juan F. (チリ 33才) 6日間 スイス国際管理研究所教授 (技術管理) 世界青年サミット出席

FOGEL, Gerardo (パラグアイ 48才) 15日間 アスンシオン国立大学教授 (社会学・人類学) 学術交流および番組交流

ABREU AMARAL, Aracy (ブラジル 55才) 15日間 サンパウロ大学コンテンポラリー美術館館長 サンパウロ大学教授 (美術史) 日本の美術館 美術事情視察

ANTUNES FILHO, José Alves (ブラジル 55才) 15日間 演劇家・演出家 日

本の現代演劇、舞踏視察

GONCALVES, José Antonio (ブラジル 53才) 15日間 国家体育審議会委員 日本の体育振興策の実情視察

NIEMEYER, Oscar (ブラジル 77才) 15日間 建築家 日本の建築事情視察

DEL BUSTO, José Antonio (ペルー 52才) 15日間 リマ・カトリック大学教授 リマ大学教授 (歴史学) 教育大臣顧問、前文化庁長官 日本の文化事情視察

[学者・研究者長期招聘者]

QUARTUCCI, Guillermo E. (アルゼンチン 41才) エル・コレヒオ・デ・メヒコ、アジア・アフリカ研究センター教授 (日本文学) 現代日本の文学とマスメディア 1984. 9. 28~1985. 9. 27 (受入機関 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化センター)

CAMPO, Pafael (コロンビア 42才) ハベリアナ大学社会学部教授 (社会学) 日本の発展過程における教育制度の役割—ラテンアメリカ諸国との比較研究 1984. 9. 14~1985. 9. 11 (受入機関 上智大学イベロアメリカ研究所)

HORI, Tetsuro (ブラジル 46才) ブラジリア連邦大学教授 (建築学) 日本の古代建築が世界の現代建築に与えた影響 1985. 7~1986. 6 (受入機関 工学院大学)

LUYTEN, J. M. (ブラジル 43才) 国立民族学博物館客員研究員 (コミュニケーション論) 16~17世紀日本におけるポルトガル人及びオランダ人居留者 1985. 4~1986. 3 (受入機関 国立民族学博物館)

LERNER, Salomon (ペルー 40才) カトリック大学人文学部長 (哲学) 日本における哲学 1985. 3. 10~1985. 5. 9 (受入機関 東京大学)

BARRON, Cristina (メキシコ 35才) 筑波大学外国人研究員 (歴史) キリスト教化の過程—日本、フィリピン、メキシコ比較研究 1985. 4~1986. 6 (受入機関 筑波大学)

トルクワト・ディ・テーリャ研究所 Instituto Torcuato Di Tella

今井圭子

アルゼンチンにおける社会科学分野の代表的な研究所の一つとしてまずとりあげなければならないのが、ブエノスアイレス市にあるトルクワト・ディ・テーリャ研究所である。同研究所の創立は1958年に遡り、27年間に及ぶ歴史の中で、アルゼンチン、ラテンアメリカ諸国に関する注目すべき研究業績を蓄積してきた。

同研究所の本来の創立者は、アルゼンチンでは屈指の内資系企業グループであるシム・ディ・テーリャ財閥の元社長トルクワト・ディ・テーリャ氏である。貧しいイタリア系移民として出発しながら人並はずれた努力によって一代で財を築きあげた同氏は、その富の一部を投じて非営利の研究所を創設することを生涯の使命としていた。しかし同氏は研究所創立前に死去され、創立事業は同氏未亡人と2人の子息トルクワト・ディ・テーリャ(社会学者)、ギド・ディ・テーリャ(経済学者)両教授によって継承された。創立の目的は「営利を目的とせず—(中略)—研究の自由と独立を尊重しながら—(中略)—アルゼンチンおよびラテンアメリカの現実」(Instituto Torcuato Di Tella, *Memoria y Balance* 1968, p. 9)を究明し、かつ現在世界が直面しているより普遍的な課題に取り組むこととされている。

研究所運営のための財源は主としてトルクワト・ディ・テーリャ財団から供給されてきたが、その他にもフォード、ロックフェラー両財団、社会科学研究審議会(ニューヨークに本部がある)、ユネスコ、米州開発銀行、アルゼンチンの科学技術研究国家審議会などから助成を受けてきた。

トルクワト・ディ・テーリャ研究所は従来経済学、社会学、都市および地域研究、公共行政、教育の5部門から成る調査研究部と、コンピューター室、図書部、出版部、事業部から構成されていた。しかしその後財政上の理由で研究部門が縮小され、現在同部門は経済学、社会学、教育学(付属研

究所に別置)の3部門となっている。研究活動は専任研究員を中心に進められているが、国内外の研究機関、研究者との交流、共同研究も重要視されている。筆者も1972年から73年にかけて客員研究員として、恵まれた研究の場を与えられた。同研究所では、研究課題、研究期間、研究形態(個人研究か共同研究かなど)の決定はいつでも個々の研究員に任せられている。そして個々の研究員は、所内研究会での自由闊達な討論をとおして相互間の研究交流を深めている。また同研究所は経済学、社会学、経営学の分野で大学院レベルの公開セミナーを開催している。

現在所長は社会経済史を専門とする Roberto Cortés Conde 教授である。各研究部門の研究員は次のとおり。

〔経済学部門〕 Juan Berlinski, Alfredo J. Canavese, Jorge Katz, Ana María Martirena Mantel, Javier Villanueva, 他。

〔社会学部門〕 Natalio Botana, Oscar Cornblit, Manuel Mora y Araujo, Alberto Petrecolla, Juan Carlos Torre, 他。

研究課題は各研究員の関心に応じて多岐にわたる。それはアルゼンチン、ラテンアメリカ諸国の政治経済社会の歴史分析から現在の経済政策に関する評価分析、政党・軍部・労働組合の構造分析、また人口動態、都市問題、地域開発に関する研究に及び、研究業績は同出版部で刊行されている。なお研究内容について詳しくは同研究所の *Memoria y Balance*、出版物リストなどを参照されたい。

1960年に設置された図書部は社会科学部門では国内有数の充実した蔵書を誇り、定期刊物1500タイトルを含む5万冊を所蔵する。一般に公開され、首都内の図書館と相互貸借を行なっている。

(所在 11 de Septiembre 2139, 1428 Buenos Aires, Argentina)

3. 近着会員業績

〔冊〕『ブラジル経済情報』№58 (ブラジル大使館 経済部)

〔誌〕『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 2 №2,3 (アジア経済研究所 1985.6,9)

〔誌〕中南米諸国便覧 (外務省中南米局 1985.4)

〔誌〕東海大学文明研究所紀要第5号 (東海大学文明研究所 1985)

〔籍〕エルネスト・ラク라우著、大阪経済法科大学法学研究所訳、横越英一監訳 資本主義・ファシズム・ポピュリズム—マルクス主義理論における政治とイデオロギー— (柘植書房 1985.5)

〔抜〕ホセ=カルロス・マリアテギ著、原田金一郎訳 ペルーの現実解釈のための七つの試論(Ⅱ)『経済学論集』第9巻第1号 (大阪経済法科大学 1985.4)

〔抜〕角山幸洋 榎本武揚とメキシコ殖民移住1~3『経済論集』第34巻第6号、第35巻第1号、2号 (関西大学 1985.2・5・6)

〔誌〕イベロアメリカ研究第Ⅶ号第1号 (上智大学イベロアメリカ研究所 1985.1)

〔抜〕山崎俊夫 格差と抗争：労資関係の調整 (国際比較) —研究ノート及び資料 (Ⅰ~Ⅱ) 『Estudios Hispánicos』第8~10号 (大阪外国語大学イスパニア語研究室 1983)

〔抜〕山崎俊夫 イスパニア国鉄道発達の一世紀半 (Ⅰ・Ⅱ) 『大阪外国語大学学報』第64・65号 (1984)

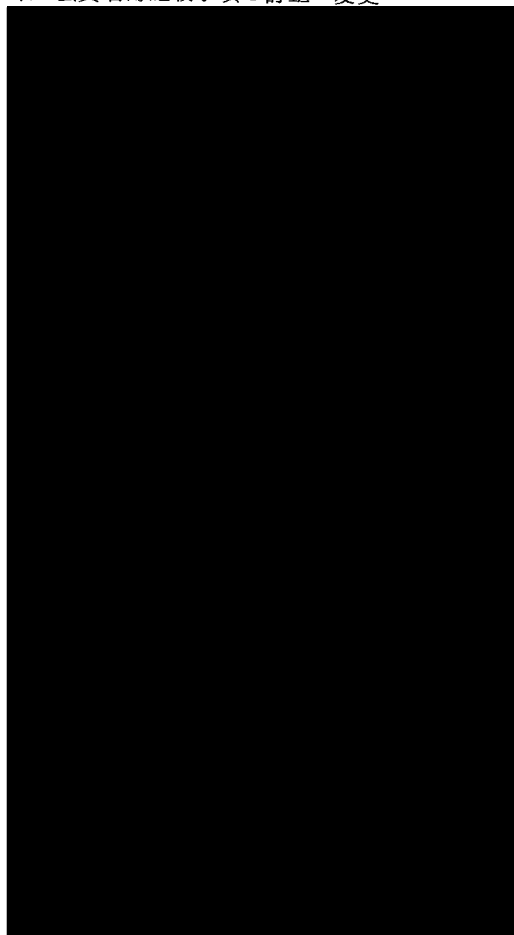
〔抜〕山崎俊夫 イスパニア国水法百年(Ⅳ) 一条文訳、及び米法及びメキシコ国憲法第27条との若干の対比—『大阪外国語大学学報』第58号 (1982)

〔抜〕山崎俊夫 テクノクラートの誕生とその途上諸国における役割—問題関係資料四篇：経済諸学の領域に量から質への転換をめざして—『大阪外国語大学学報』第61号(1983)

〔抜〕住田育法 「ブラジリダーデ」と北東部地方奥地の文化—ヴェルガス時代を中心として『COSMICA』XIV (京都外国語大学 1985.3)

4. 事務局から

i) 会員名簿記載事項の訂正・変更



ii) 岩波ホールより事務局あてに、ニカラグア映画の上映案内が送られましたのでお知らせします。

ミゲル・リッティン監督

「アルシノとコンドル」(Alsino y El Condor)

(1983年モスクワ国際映画祭金賞受賞)

1986年2月8日より岩波ホールでロードショー

No.20. 1985年12月1日発行
▽157 東京都世田谷区成城
6-1-20
成城大学法学部中川研究室内
日本ラテンアメリカ学会事務局
☎03-482-1181